

掌握することは現下特に緊要なるを思ふ。敢て阿教圈要圖を茲に紹介する所以である。

(平凡社發賣、解説並に索引附、定價七圓)(三上正利)

佛領印度支那——政治・經濟

太平洋協會編

皇軍は大陸に駒を進めて既に三年有餘の歲月を閲してゐるが、皇戰その終る處を知らない。それは我日本の使命とする大東亞共榮圈確立を目指す我軍民一致の努力であるが、此が皇戰の意義を解しないもの、一つに援將佛領印度支那がある。一方歐洲に於ては佛蘭西は獨逸に屈從する事になつた結果、佛蘭西は其極東植民地支配能力を缺如するに至り、多數の佛領植民地の歸屬は重要な問題となつた時に、皇軍は援將監視隊の名の下に佛領印度支那に進駐する事となつた。そして今日更に此等南方問題の重要性は認識せられて此が對策は愛國の識者の間に論せられるに至つた。

此時に當り、太平洋協會に於ては「佛領印度支那の産業・經濟・政治の調査を以て極めて緊要なりと認め、銳意この研究に當り、」茲にその成果が公刊された事は誠に時宜を得た事と云はねばならぬ。

本書は五編より成つて居り、豊富にして且周到なる資料を以て記述せられてゐる。即ち第一編統治に於ては佛蘭西の佛印に對する植民政策の變遷を述べて、其批判が爲されてゐる。佛蘭西がアフリカに對して成功した、その傳統的植民政策とも云ふべき同化

主義政策は佛印への適用に於て失敗したと論じてゐる。現在に於ける統治は此を英國の印度、和蘭の東印度のそれに比すれば尙多分に干渉的且專制的にして、原住種族の政治的自由は著しく制限され、その取締は苛酷であるとしてゐる。第二編農業に關しては、佛印に於ける重要な産業は農業と鑛業とである。就中農業は現在に於ても其社會的基礎を爲してゐる。土人の傳統的米作農業に對抗して、歐人の近代的プランテーションが發展してゐる事を土地所有關係、經營、小作人、勞働者等に就て詳論し、第三編交通に於ては、一般的には交通機關は發達してゐるとは云はれないが、此が整備は各國行政の統一であり、國內開發、更に國防的見地から觀て重大なる問題であるから歴代總督は交通施設の擴充には連續的努力を拂ひ來つた事を述べてゐる。就中援將ルートとして世界の視聽を集めつゝある雲南鐵道はデューメル總督の時に佛蘭西の西南支那へ勢力伸張の目的で計畫されたものである。第四編佛印の貿易は、是を總る佛支、日の三者の關係を考察することに依つて始めて日本貿易の上に佛印の占める地位の重要性を理解し得ると共に、東亞經濟圈の確立に當つて、我々が佛印の經濟に對して將來如何なる關心を拂ふべきか理解することが出来るであらうと論じて、貿易一般、關稅制度に關して述べてゐる。第五編佛印に於ける華僑は總人口に對し、僅か一・四％に過ぎない。彼等は大部分が商人であつて、特殊の商才を持つてゐて、原住種族の經濟の基礎たる米の商業は古來彼等の獨占する處で、土人の上に占むる彼等の勢力は強く、又財政金融上にも大なる地位を占めるが故

に、佛印政府も取締を嚴にしても、其勢力を除きかねてゐる。彼等は土着民とは同化しないが、併し密接不離の關係を結んでゐる。彼等は一般に愛國心を缺如せるも、出身郷村に對する愛着心は頗る強く、送金其他の關係を通じて支那本土と結ばれてゐることを述べてゐる。そして卷末には索引と參考文獻解題及文獻目録が附されてゐて、豊富なる資料が解説されてゐるのは後學を益する處多大であらう。

今や大東亞共榮圈確立と云ふ、歴史の大事業遂行にあたり、基礎的知識を提供するか、る科學的調査の公刊は誠に時宜を得たものと思はれる。

(東京河出書房、五一頁、定價五四八十錢)(和田俊二)

太平洋二千六百年史

海軍有終會編

紙幅制限の爲、省略された部分があるにも不拘、千頁を越えるこの書は、我が國を中心とし太平洋を繞る諸國勢力消長の歴史、竝に關係諸地方の現勢を編述し、國民の向ふ所を明示する事を目的として、海軍有終會が海軍軍事普及部の徳惠もあり、海防議會との協力に依り、皇紀二千六百年記念事業として大島良之佐海軍大佐を主務とし、多くの人々を動員し、一年有餘に亙る研鑽の後、世に送つたものである。

前半六百頁餘が、第一、歴史篇として歐洲人來航以前の太平洋及日本の姿から筆を起し、支那事變勃發直前迄の太平洋を舞臺と

して、次第に侵略し來る歐米諸國、それに對抗する皇國の姿を畫き、後半四百頁餘は、第二、現勢篇として太平洋を繞る各地方、島の狀況を、日本(内南洋、新南群島)、支那(海南島、廣東)、及諸泰、米、佛、蘇、蘭、葡の順に列學し、その沿革、自然、政治、軍備、産業、貿易、交通等に分け詳述してある。中米、南米の太平洋岸は紙幅制限の犠牲となつて割愛されて居る。

太平洋をめぐる世界の風運急なるに従つて、この地方を色々の方面から、色々の立場で取上げた著書が澤山出版されて居るが、本書は今迄出版された類書の中で、最も優れたものの一つに挙げられるべきである。それは、決して大作の故ではなくして、その研究があくまで確實に、あくまで學究的になされて居る故であつて、地圖を傍に靜かに本書をひもどく讀者は、淡々たる本書の記述の中に、もゆる血潮の波うつつるを感じるのであらう。皇國を負ふて立つ人々、負ふてたゝんとする人々の精讀を希望して止まない。

六百頁餘に亙つて書かれて居る歴史篇の記述の中の個々の事柄を取上げて尋ねたならば、その中に書かれて居る事項は、ほとんど一度聞いたり讀んだりした事ばかりである。そうした事柄を書いてあるにも拘らず、この篇を讀み出すと、六百頁を讀み終らねばやめられないのは、この歴史篇の記述が、太平洋におきた種々の事實を、單に個々の事實として、もれなく集積する事に主力をそ、がないで、東洋におしよせてくる一つの大きな流を見出し、その流れの現象として、個々の事實を密接に關聯せしめようとした、その努力に依つて居るのではあるまいか。そしてその事が新